

# 『枕草子』積善寺供養章段の構成

—時間軸の不統一とモザイクの様相—

古 瀬 雅 義

はじめに

文学史上「随筆」に分類される「枕草子」は、その内容の特質から随想的章段、類聚的章段、日記的章段の三つの部分に分類される。私は「枕草子」の章段内構成に注目して分析を進めているが、書き手が「出来事」を「書く内容」としてまとめ、順序立てて話を再構成する時、その展開と表現を有機的に絡み合わせ、結果として章段全体の構成が緊密になるよう、意図的に計算して書いていることを論証してきた。とくに日記的章段において顕著な手法と見られる。

本稿では日記的章段の中で最も長文で知られる「積善寺供養章段」(第二六三段「閨白殿、二月二十一日に<sup>と</sup>)をとりあげる。当該章段は、中閨白家の晴舞台である二月二十一日の「積善寺供養」前後の記録として描かれ、その準備のため、中宮定子が二月一日に内

裏から実家の二条宮へ退出する所から始まる。私見では場面と内容によって章段全体が十四の部分に分類できる。雨で見苦しくなった桜の造花を早朝に撤去した「花盗人」をめぐる閨白道隆との和歌をふまえた応酬や、最末尾の一文「されどその折めでたしと見奉りし御ことども」が三卷本系の独自本文であり、中閨白家の栄華を描く主題とは異なる視点が確認できる「位相」の問題、また日記的章段でありながら時間の流れが相前後する部分があつて時系列にそつた構成とはなっていないなど、見所の多い章段であるが、本稿では書き手による「出来事」の記述と時間の進行という視点から、話の再構成のありようを論じる。

時間軸に注目すると、その進み方が相前後する部分が存在する。この現象は三卷本系・能因本系ともに共通し、異本間による相違はないため、当初からの現象と見てよいだろう。日記的章段としては、時間軸の不統一は極めておかしな現象であると言わざるを得な

い。しかし、章段内構成の緊密性をねらった結果の現象という視点からとらえ直してみると、これは書き手の必然性による「再構成の工夫」と見る事ができるのではないだろうか。

本稿では、女房たちの乗車順争いをめぐる清少納言と定子との各々の言説が対応する様に描かれていることや、当該章段において定子に仕える女房たちの一人としての清少納言の位置付けを手がかりとし、さらに当該章段の主題「関白道隆の栄華と定子のすばらしさを描くこと」の下に位置する小さな各主題、たとえば清少納言の臨機応変な対応能力、定子と感覚が共通する点、定子から特別扱いを受けている点、新参者として見られている点、出来事への対応に女房としての成長ぶりが確認できる点など多面的な要素に対して、時間軸の不統一を犯してまでもそこに位置付けられた場面が、モザイク的に融合しており、それぞれの小主題を支える構成要素として有機的かつ効果的に機能していることを論証する。

### 一、史実としての積善寺供養

当該章段に描かれた内容は、正暦五年（九九四）二月二十一日に、中関白家総出で行われた法興院の積善寺での一切経供養を題材にして、それに向けての諸準備と当日及び後日談までを記し、中宮定子の父関白藤原道隆が、栄華を極めた時期の出来事にかかわった自分の見聞を描き出している。まず記録類の関係記事から検証し、

史実年時を考証してみたい。

〈資料一〉記録類の関係記事

・【本朝世紀】正暦五年二月条

十一日癸巳。天朝間晴。今日列見也。午後。権大納言藤原

道長卿。参議同道綱卿。同安親卿参着左仗座。被定采

十三日中宮行啓可供奉諸衛官人。仰其事。

十三日乙未。此日以亥刻。中宮幸啓東三条院。

二十日壬寅。今日。関白（道隆）有被供養積善寺。辰一剋。

東三条院（詮子）件寺被参入。同點。中宮（定子）有

行啓。供奉諸司諸衛如常。又、彈正尹為尊親王。四品

敦道親王。右大臣。内大臣（道兼）。大納言藤原朝光

卿。同濟時卿。権大納言道長卿。へ朽損（中納言同顯

光卿。参議同懷忠卿。同時光卿。同実資卿。平惟仲

卿。藤原公任朝臣。同誠信朝臣参入。辨少納言外記史

皆参。自餘四位五位不可勝計。

二十一日癸卯。天陰雨降。（以下略）

・【日本紀略】正暦五年二月条

十三日乙未。中宮（定子）行啓東三条院。

廿日 壬寅。関白供養積善寺。中宮（定子）行啓。東三条院

（詮子）同以御幸。彈正尹為尊親王。四品敦道親王。

右大臣（道兼、但し重信の誤）。内大臣以下諸卿参入。

先之去十七日。関白申請以件寺為御願寺。勅許之。

正暦五年二月二十日に関白道隆が積善寺で供養を行い、中宮定子をはじめ東三条院詮子・為尊親王・敦道親王・諸卿から弁・少納言・外記・弁官局の史に至るまで皆参上している。「公卿補任」及び「蔵人補任」から当日の官職と人物を一覧してみよう。

〈資料二〉正暦五年二月時点の官職。

・「公卿補任」

関白 道隆。

左大臣 (前年に源雅信の薨去以後、空席)。

右大臣 源重信。

内大臣 道兼 (右大将)。

大納言 朝光。濟時 (左大将。皇后宮大夫。按察使)。

権大納言 道長 (中宮大夫)。伊周。

中納言 顕光 (左衛門督。別当)。源保光。公季 (春宮大夫)。

権中納言 源時中。源伊勢 (太皇太后宮権大夫。右衛門督)。

道頼。

参議 道綱 (右中将。備前権守)。安親 (修理大夫。備前守)。

\* 懐忠 (左大将。勘解由長官)。時光 (大蔵卿)。実資

(左兵衛督。美作権守)。平惟仲 (右大将。近江権守)。

公任 (近江守)。誠信 (春宮権大夫。侍従)。

非参議 懐平 (修理大夫)。源泰清 (左京大夫)。高遠 (兵部

卿)。源清延。在国。菅原輔正 (式部大輔)

・「蔵人補任」

蔵人頭 源扶義 左中弁、内蔵頭、中宮権大夫、播磨権守。

八月二十八日任参議。

源俊賢 右中弁、太皇太后宮権亮。

中関白家を中心に系図を巻末注にまとめたので参照されたい。

〈資料一〉から、史実と「枕草子」に記された「二月二十一日」の齟齬が確認できる上、次の五点が指摘できる。

i 二月一日に中宮が「二条宮」へ里下がりする記事は、史書の類には見えないこと。

ii 「本朝世紀」二月八日条に「天陰。大雨終日降」とあること。

従つて「花盗人」の出来事は二月九日早朝と推定される。

iii 二月十三日の「中宮行啓」は、内裏からの里下がりを目指すのではなく、実家の二条北宮から東三条院への表敬訪問を指すと

考えられること。「本朝世紀」にはこの扱いを中宮大夫道長が十一日に協議したとある。十三日の行啓は「枕草子」には描かれていないため、清少納言の里下がり期間中と考証できよう。

iv 史実上、積善寺供養の当日は二月二十日であること。

v 「本朝世紀」で二月二十一日の天気は「天陰雨降」とあり、「枕草子」当該章段末尾の「又の日、雨の降りたるを」は二十

一日の雨を指すものと考証できること。

とくにivとvから、積善寺供養は二十日の出来事となるはずで、「枕草子」にある「二月二十一日」という記述は誤りということになる。現在これが定説となっており、私もこの立場をとる。

## 二、当該章段の場面展開

当該章段全体を、時間軸と場面展開に着目し、十四の部分に分割して考えてみたい。日付は、供養当日を史実年時の「二月二十日」に訂正したことを除いて「枕草子」本文の記述に従った。

〈資料三〉当該章段の十四場面

- ①二月一日（124頁1行目） 積善寺供養に先立ち、定子が二条宮に退出。自分の乗車の事⑤は省筆。翌二日朝の二条宮の様子。
- ②二月二日（124頁15行目） 関白道隆登場。兄、妹君たちや母貴子ら家族が会合する様子。内裏から一条天皇の使者が日参。
- ③二月三〜七日（127頁8行目） 雨にしろれた桜の造花を「泣きて別れけむ顔に心劣りこそすれ」と喻え、その撤去と願末（花盗人）で見せた清少納言の気の利いた対応（「春の風」の仕業とし、さらに壬生忠見の「我より先に」の歌を引いて答えたこと）に満足する関白道隆と定子の様子。
- ④二月八日か九日（130頁1行目） 里下がりした清少納言と定子の間で、「白氏文集」「長相思」をふまえた私信が往来。

⑤二月一日夜（130頁6行目） 時間進行がさかのぼる。女房たちの乗車争いの顛末。定子が清少納言を特別扱いし、乗車争いをしたり、それを制しなかつた古参女房たちを非難する。清少納言が、その場をとりなして收拾させている。

- ⑥当日前夜 二月十九日（132頁8行目） 供養前日、清少納言は二条宮南院に帰参。女房たちの支度の様子。
- ⑦当日朝 二月二十日（132頁16行目） 伊周・隆家直々の指揮の元、女房たちが乗車。
- ⑧当日 二月二十日（134頁1行目） 二条宮南院を出発。土御門殿から来た女院詮子の行列と、それを世話する関白等の様子。
- ⑨当日 二月二十日（135頁9行目） 定子の輿の行列の様と、到着した積善寺の様子。
- ⑩当日 二月二十日（137頁5行目） 積善寺到着後、定子の元に参上。定子から上席を与えられる特別扱いに感激する。
- ⑪当日 二月二十日（139頁2行目） 関白道隆が参上。道隆が感激する様子。道隆一家の様子。
- ⑫当日 二月二十日（140頁13行目） 一切経供養開始から終了までを簡略記述。宣旨により定子は内裏へ直に参上する。

⑬当日 二月二十日(141頁10行目) 一条天皇の再度の要請に

よる定子の急な内裏帰参のため、二条宮と内裏との双方で連絡が十分に行き届かず、女房たちが混乱する。

⑭翌日 二月二十一日(141頁17行目) 翌日の雨を見ての道隆の自賛。三巻本系では章段末尾に独自本文を有し、清少納言の後日の評言をもって、章段を締めくくる。

当該章段は二月一日に中宮定子が内裏から里邸として正暦三年に新造された「二条宮」に移御する所から始まり、記述は日を追って進行する。場面③が雨の翌朝で「花盗人」の応答で知られる部分である。場面④では、積善寺での一切経供養参加準備のため、清少納言が里下がりしていた時に定子から手紙を賜り、「白氏文集」「長相思」の一節をふまえたやりとりをしている。

〈資料四〉「白氏文集」卷十二感傷「長相思」(前半部)

九月西風興

九月西風興ル

月冷霜華凝

月冷カニシテ露華凝ル

思君秋夜長

君ヲ思ヒテ秋夜長シ

一夜魂九升

一夜魂九タビ升ル

二月東風来

二月東風来タリ

草拆花心開

草拆ケテ花ノ心開ク

思君春日遲

君ヲ思ヒテ春日遅シ

一日腸九廻

一日腸九タビ廻ル

(問) 定子

(答) 清少納言

定子は「二月」の春の昼間に「花の心開けざるや、いかにいかに」と問いかけ、それに対し清少納言はその前の部分を用いて「秋はまだしくはべれど、夜に九度のぼる心地なむしはべる」と返事をし、「白氏文集」をコンテクストとして互いに「君ヲ思ヒテ」過ごしていることを示したやりとりとなっている。定子は清少納言の不在を寂しく思い、里下がりも「今少し近うなりてを」と引き留め、また里下がり中にもこのような手紙を遣わしていたのである。ここで比較されるべき箇所が、場面②に記される「夜さり、まかづる人多かれど、かかる折のことなれば、えとどめさせ給はず」の本文である。女房たちは積善寺供養当日の装束などの準備のため、夜分に里下がりする者が多いのだが、当日の準備のための里下がりと心得ている定子は、女房たちを引き留めてはいない。つまり清少納言は定子から特別扱いを受けていたことが語られていることになる。

清少納言が準備を調べて再び定子の元に参上したのは、積善寺への行啓当日前夜の場面⑥である。この時、定子は二条宮の南院に移御していた。この後、話は積善寺への行啓の見事さと供養、そして後日談へ進むのだが、枠で囲った場面⑤に注目したい。里下がりしていた場面④と再び参上してきた場面⑥とに挟まれた部分である。

### 三、「出でさせ給ひし夜」はいつの事か

場面⑤は「出でさせ給ひし夜」の出来事で、女房たちが我先に車

に乗ろうと争う場面から始まる。まず、この「夜」とはいつの事かについておさえておきたい。三卷本系勅物(陽明文庫本)には何も記述がないが、江戸時代前期の延宝二年(一六七四年)に相次いで刊行された古注釈以降、二条の宮から積善寺へ行啓した日とする説と、内裏から二条の宮へ移御した日とする説がある。

古注釈では「二条の宮から積善寺へ行啓した日」(すなわち二月二十日未明のこと)と解釈する。加藤馨齋「清少納言枕及紙抄」(延宝二年五月刊)は、場面④から「二条の宮より中宮并女房達の、積善寺へ移りおはしますさまをかけり」とし一連のこととして捉え、続く場面⑤を「以下は、中宮の、積善寺へ移入給ふ夜、供奉の車の物惣がしきさまを云也」と解釈する。また北村季吟「枕草子春曙抄」(延宝二年七月刊)は、場面④については「此一切経供養は十日比なれば。后宮の御供の用意に清少退出する也」とし、現在の解釈の基盤となっているものの、場面⑤の「出させ給ひし夜」を「釋泉寺へ行啓の夜也」とし、「二条の宮から積善寺へ行啓した日」とするのは加藤馨齋と同じである。つまり江戸前期の古注釈では現代の解釈と異なり、時間が遡ってはいないとするのである。

一方、現在の定説となっている「内裏から二条の宮へ移御した日」とする説は、明治四十四年刊行の武藤元信氏「枕草紙通釋」から確認できる。「此詞によれば中宮は一旦二条の宮より内裏へ還らせ給ひ、更に二条の院へ行啓ありしなり。前の「内の御使、日々に

まゐる」とあるを併せ考ふべし」とある。しかし一度内裏へ還御した後の二度目の二条宮移御としており、この点で現在の解釈と異なる。また史書の記録とも合わないため、私は従わない。

時間を遡って「二月一日の夜の出来事」の記述とみるのは、大正十三年刊行の金子元臣氏「枕草子評釈」からである。「中宮の二条の宮へ出でさせ給ひし夜の略。以下、上に「二月朔日のほどに二条の宮へ入らせ給ふ」とある折の記事なり。「通釋」以降の註に、中宮は一旦内裏へ還御ありて、更に二条の宮へ行啓ありし也とあるは、大いなる誤なり」と先行説を強く否定し、現在の解釈の基盤となっている。昭和六年刊行の関根正直氏「枕草子集註」も「二月朔日のころ、内裏を出でて二条の宮へ入らせ給ひし夜をいふ。立ちかへりて、最初の夜の事を記せるなり」とする。大正末期に金子元臣氏が時間を遡った記述との解釈を唱えて以後、昭和初期に至り「時間軸の不統一」を認める説が定着してきた研究史をたどることができる。私も「時間軸の不統一」を認める説を首肯する立場をとる。そうなると、時間軸についての問題が浮上してくる。当該章段は二月一日の場面①から記述が始まる日記的章段であり、時間の進行を追って出来事が書き進められるはずにもかかわらず、女房たちの乗車争いの場面⑤は、時間軸を遡って記述されていることになる。すなわち二月八日か九日ごろ、清少納言が自分の支度のため里下がりしていた場面④の後、再び二月一日に内裏から二条宮へ移動した

場面①に当然含まれていた乗車順をめぐる出来事が、場面⑤として後から詳細に語られていることになる。

#### 四、場面⑤の本文分析

時間軸の不統一箇所として、場面⑤を詳細に分析してみたい。

〈資料五〉場面⑤前半部

出でさせ給ひし夜、(二月一日の夜に相當)車の次第もなく、まづ、まづと、乗り

騒ぐが憎ければ、さるべき人と、なほ、この車に乗る様いと騒がしう、祭の婦かへなどのやうに倒れぬべくまどふ様のいと見苦しきに、「たださはれ、乗るべき車なくてえ参らずは、

おのづから聞しめしつけて、賜はせもしてむ」など言ひ合はせて立てる前より、他の女房達がおしこりてまどひ出でて、乗り果てて、「か

うか」と言ふに、「まだし、ここに」と言ふれば、宮司みやうき寄り来て「誰々おはするぞ」と問ひ聞きて「いとあやしかりけることかな。今は皆乗り給ひぬらむとこそ思ひつれ。こは、などかう遅れさせ給へる。今は得え選乗せむとしつるに、めづらかなり

や」など驚きて寄せさせれば、「さは、まづその御心ざしあらむをこそ乗せ給はめ。次にこそ」と言ふ声を聞きて、「けしからず、腹ぎたなくおはしましけり」など言へば、乗りぬ。その次にはまことに御厨子むかしが車にぞありければ、火もいと暗きを笑ひて、二条の宮に参り着きたり。

中宮定子の二条宮移御に従い、お仕えする女房たちも移動するが、配車の指示もなされず、女房たちは我先に乗車を争い、騒がしくしていた。その様子を記した箇所が傍線部ⅠⅡⅢである。「乗り騒ぐが憎ければ」や「いと見苦しい」「おしこりてまどひ出でて」の表現から、清少納言は「見苦しい」と感じていることが確認できる。そして清少納言は然るべき女房たちと「乗れずに乗上できないれば、定子の方から気が付いて車を回して下さるでしょうよ」と話し合い、騒ぎから身を引いていた。結局、下級女官の得選たちが乗る直前に、女房グループの最終便として二条宮へ移動することになった。

一方すでに先着していた定子は清少納言を待ちかねており、右京や小左近など若い女房たちに命じて探させていた。ようやく参上した清少納言たち一行に対して遅くなった理由を聞いただし、清少納言と同乗していたベテラン女房の右衛門たちが答えている。

〈資料六〉場面⑤後半部

御輿はとく入らせ給ひて、しつらひ居させ給ひにけり。

「ここに呼べ」と仰せられければ「いづら、いづら」と右京

小左近などいふ若き人々待ちて、参る人ごとに見れどなかりけり。下るるに従ひて四人づつ御前に参り集ひてさぶらふに、言「あやし。なきか。いかなるぞ」と仰せられるも、知らずある限り下り果ててぞ、からうして見つけられて、右京等「さばかり

仰せらるるには、などかく遅くは」とて、ひきゐて参るに、見れば、いつの間にかう年ごろの御すまひの様におはしましつきたるにか、と、をかし。

「いかなれば、かうなきかと尋ねばかりまでは見えざりつる」と仰せらるるに、ともかくも申さねば、もろともに乗りたる人「いとわりなしや。最果の車に乗りて侍らむ人は、いかでか疾くは参り侍らむ。これもほとほとえ乗るまじくは侍りつるを、御厨子がいとほしがりて譲りて侍るなり。暗かりつるこそわびしけれ」と笑ふ笑ふ啓するに「行事する者の、いとあやしきなり。また、などかは心知らざらむ人こそはつつまめ。右衛門などは言へかし」と仰せらる。「されど、いかでかは走り先立ち侍らむ」など言ふも、かたへの人、憎しと聞くらむかし。「様悪しうて、高う乗りたりとも、かしこかるべきことかは。定めたらむ様の、やむことなからむこそ、よからめ」と、ものしげにおほしめしたり。「下り侍るほどの、いと待ち遠に苦しければにや」とぞ、申しなほす。

清少納言は遠慮して答えなかつたので、同乗した女房が「最後の車だったので仕方ないし、それも危なかつたのだ」と答えた。定子は二重傍線部Ⅳで行事役の不手際のみならず、右衛門などベテラン女房がいながらそれを黙認していたことを叱るが、新人で不慣れた清少納言には「などかは心知らざらむ人こそはつつまめ」と言い、

仕方ないとかばう。叱られた右衛門が「どうして我先に走つて乗れましようか」と弁解すると、それを聞いた先着の女房たちは自分たちをそういう言い方で表現されたことに対して「憎し」と感じた。

一方定子は二重傍線部Ⅴで自分の女房たちが我先に争つて乗車し、品位を保たなかつたことを聞いて「ものしげにおほしめしたり」と不満げである。その場の雰囲気が悪くなったことを察知した清少納言が、取りなしの言葉を定子に申し上げてこの場面⑤が終わる。

ここで我先に乗車の先立ちを争う事に対する(資料五)の清少納言の感覚と(資料六)の定子の感覚を対比すると、両者に共通する感覚が二つあることが確認できる。すなわち傍線部ⅠⅡと二重傍線部ⅣⅤ、及び傍線部Ⅲと二重傍線部ⅠⅡⅢが対応しているのである。

二人が共有している感覚は、前者においては①行事役はきちんと準備をし、仕切らなければならないこと。②乗車は、あらかじめ定めた順序通りに行い、静かで上品に振る舞うべきであること。③先を争つて騒ぐなど優雅でなく、見苦しいと感じることの三点である。

また後者では、清少納言は車争いなどせずとも定子が気が付いて迎えを寄越して下さるだろうと余裕を持つて構え、また定子は清少納言を心待ちにし、到着次第自分の所に来させるよう指示するなど、お互い相手をなくてはならぬ存在として意識しあっていたことが語られ、この点でも二人の通い合う感覚を確認することができる。



## 五、章段内構成の視点から

「乗車争い」は、場面①で「ねぶたくなりにはしかば、何事も見入れず」と完全に省略されているが、場面⑤に至り時間を遡って詳細に記され、場面⑦の積善寺への移動時には伊周と隆家が直々に配車を仕切り、女房たちを名簿順に呼び立て、整然と乗車させている。

この構成にいち早く注目されたのが稲賀敬二先生で、「車に乗る時の二つのエピソードを対照して書こう」という意識が、①に続いて（あるいは①の段落の中で）書かれるのが自然である⑤の記事を、⑦の近くに移すことになった。そう考えれば、この積善寺供養記は、文章効果まで計算に入れた構成的な文章であることになる」と述べられ、女房達の乗車を巡る二つのエピソードを対照的に構成した、と指摘しておられる。また「この配車の不手際があつたから、二十日の供養当日は、伊周・隆家の陣頭指揮のもとに女房たちは車に乗せられるはめにもなるわけでもある。その意味では、二条宮行啓当夜の記事を後の方へ廻したのは、表現効果考えた執筆意識のあらわれと理解できなくもない」と述べられ、後に続く場面⑦との関連を指摘される。文章効果まで計算に入れた構成になっていることを指摘された説であり、女房たちの乗車をめぐると二つのエピソードを対照的に構成したと見る説として注目されよう。

一方、萩谷朴氏は当該章段を、時間意識の歴然たる稀有の章段と

してとらえながらも当該箇所を「繰り返し叙法」と見てそこに時間意識を認め、実録的日記的效果を狙った、とされた。「清少納言は、二条北宮に到着した翌朝の新鮮な印象を読者に伝える為に、到着までの波瀾に富んだ事件は、敢えて省略したのであろう。しかしその事は、是非書き留めて置きたかつたから、一たん宿下がりして、次に法会の前夜帰参するまでの空白の時間に、行啓当夜の時点に立ち戻って、叙述を繰り返すこととしたのであろう」と述べられ、読者を意識した省略として解釈し、書き留めておきたかつたから叙述を繰り返して多角的描写とした、と指摘される。両者の説ともに書き手の意図的な構成としてとらえ、読み手に対する効果を狙つたものと見る点が共通する。

私はこれらの説をさらに進め、このような書き方をした書き手・清少納言の意図したねらいを、書かれている内容と章段内の構成、つまり話の順序としての必然性の視点から、とらえ直してみたい。当該章段の全体を通して、清少納言が定子から特別扱いを受けていることは、五点の指摘ができる。

i 場面③の「花盗人」の箇所、雨にしおれた桜の造花を「泣きて別れけむ顔に心劣りこそすれ」と喩え、造花の撤去とその顛末に、「春の風」の仕業と答えた清少納言の対応を、定子は父道隆に誇らしげに語る。

ii 場面④で、定子から直々に里下がりを引き留められ、さらに

準備のための里下がり中、定子から「白氏文集」「長相思」をふまえ「君ヲ思ヒテ」過ごすという私信を受け取っている。

iii 場面⑤で、二条宮への到着を定子から心待ちにされていた。

また清少納言は新参者として、対応の不備を免責されている。

iv 場面⑨で、積善寺到着時に定子が兄伊周に指示した結果、清少納言は伊周自らに引率され、参上している。

v 場面⑩で、定子は几帳から出て清少納言を迎え「我をば、いかが見る」と問い、さらに上臈女房の宰相の君に対し、清少納言と席を替わるようにとまで指示する。同僚から「殿上許さるる内舍人なめり」と皮肉を言われつつも、「いと面だたし」と得意げで、「身の程に過ぎたることも」と感激している。

ちなみにこの宰相の君は富小路右大臣顕忠の孫娘で、決して不出來な女房ではない。七九段では齊信との会話に「白氏文集」「驪宮高」をふまえ「瓦に松は有りつや」と応対するなど、和歌漢籍の知識が豊富で、定子の元で才女ぶりを發揮するほどの女房である。

## 六、主題の位相と各場面の相関

当該章段は、積善寺での一切経供養前後の中関白一家の栄華の様子と、定子のすばらしさを描いた章段で、それに自分がどう関わったのかを中心に記している。私はこれを「大きな主題」ととらえる。そしてその下に五つの「小さな主題」が設定されていると見る。

i 清少納言が女房として臨機応変な対応能力を發揮したこと。

ii 定子と清少納言に共通する感覚が存在すること。

iii 清少納言が定子から上臈古参女房たち以上の特別扱いを受けていること。

iv 出来事への対応に、清少納言の女房としての成長<sup>23</sup>ぶりが見られること。

v 清少納言がまだ新参者の扱いを受け、自らもその気分を記していること。

この「小さな主題」に対して、出来事としての各場面がどのように関係づけられ、描き出されているかを考えてみたい。

まず、i 清少納言の臨機応変な対応能力の發揮については、場面③では和歌をふまえた表現をしたこと、場面④では「白氏文集」「長相思」と理解しての返答をしたこと、場面⑤では定子の不興と先輩女房の怒りを回避するための言動をしたことで描き出している。

次に、ii 定子と清少納言の共通する感覚については、場面④では「白氏文集」「長相思」をふまえた贈答をしたこと、場面⑤では乗車争いを見苦しいと見る感覚が共通することで描き出している。

iii 定子から上臈古参女房たち以上の特別扱いを受けていることについては、場面④では里下がり中に参上を促す手紙を個人的に受け取っていること、場面⑤では到着を心待ちにされわざわざ探されていること、場面⑨では指示どおり伊周に引率されて参上しているこ

と、場面⑩では長押の上の席を上臈女房の宰相の君と交替させてまで用意しようとされたことでそれぞれ描き出している。

iv 出来事への対応に女房としての成長ぶりが見られることについては、場面③では「花盗人」事件に古歌の引用で応対し評価されたこと、場面④では定子からの「白氏文集」「長相思」の詩歌引用を理解した返事を出したこと、場面⑤では定子の好まないことはせず、また場をとりなす発言で事態を收拾したことで描き出している。

v まだ新参者の扱いを受け自らもその気分を記していることについては、場面⑤では定子が清少納言を新参者として弁護していること、場面⑥では再出仕の遅れた清少納言が「なか今までまゐりたまはざりつる」と女房から叱られていること、場面⑦では乗車場所への移動で渡殿を通る時の緊張感を「まだうひうひしきほどなる今参りなどは、つつましげなるに」と記すことで描き出している。

### まとめ

以上の分析から当該章段において、出来事としての各場面がモザイクの様に嵌め込まれることで、i から v の〈小さな主題〉はそのモチーフが各場面で繰り返されて相乗効果を生み、強く印象づけられているという現象が指摘できよう。なかんづく場面⑤は、モザイクの様に完全に組み込まれ、どの〈小さな主題〉にとつてもそれを引き立たせる様に関連づけられている。したがって場面⑤のこの位

置への配置は、章段構成の点で有機的に機能していると言える。

つまり当該章段は、場面⑤がこの位置に嵌め込まれたことで時間軸の不統一が起こったけれども、それぞれの〈小さな主題〉を支える構成要素という点では、場面⑤が中枢部分として有機的に機能しているために〈小さな主題〉それぞれが一層印象づけられる効果を生んだと見ることが出来る。場面①と場面⑦で、移動の際の車の手配の件が対照的となるのはもちろんのこと、それ以外にもこれら〈小さな主題〉をさらに引き立たせるために、場面⑤の「乗車争い」における清少納言の感覚や言動の描写をこの位置に置くことの必然性は、章段構成上とても高い。この点を書き手である清少納言は考えて、時間軸の進み方が相前後する部分が存在する現象を引き起こしてまでも、このように話を再構成したのではないだろうか。

日記的章段を出来事の記録として見た場合、時間軸の不統一は出来事の順序が混乱したことになるが、主題を効果的に描き出すため章段内構成の緊密化をねらったものにとらえ直すと、書き手による意図的な再構成の工夫と見ることが出来るのではないだろうか。

### 【注】

(1) 本稿では、時系列順に出来事を記していない書き手の意図的な構成を考へるといふ観点から「日記章段」とせず、「日記的章段」と称する。「枕草子大事典」(勉誠出版 平成十三年)によると、「日記章段の呼称は「日記的章段」の略と考えてよい」とある。本稿の趣旨に鑑みて「日記的章

段」で統一した。

(2) 『枕草子』本文は、すべて三卷本系の陽明文庫本を底本とした石田穰二氏訳注『新版 枕草子』(角川ソフィア文庫)による。ただし一部私に仮名表記を漢字に改めた箇所がある。

(3) 能因本系本文は、三条西家旧藏理学習院大学蔵本を底本とする根来司氏編著『新校本 枕草子』(笠間書院 平成三年)による。

(4) 『本朝世紀』と『日本略記』は増補新訂『国史大系』(吉川弘文館)による。正暦五年二月の条は『小右記』『権記』共に現存する記述がない。『小右記』は『百鍊抄』からの逸文資料(二月四日条)を確認できるが、菅丞相の託宣詩の記事であり、積善寺供養に関する記述は見えない。

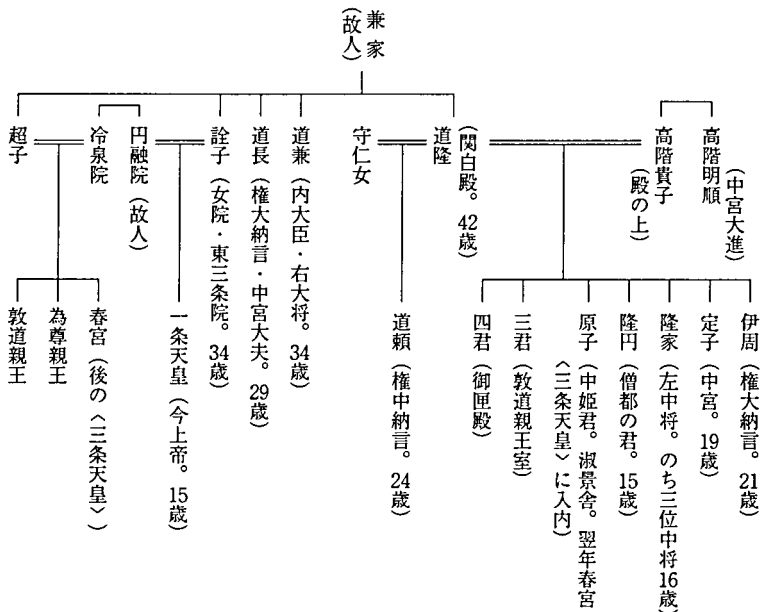
(5)  は校勘者の黒板勝美氏による欠字補入を示し、へゝは傍注として付された人物考証を示す。

(6) 『公卿補任』は、増補新訂『国史大系』(吉川弘文館)による。

(7) 『藏人補任』(続群書類従完成会 平成元年)による。

(8) 名前右肩に付した\*は、半年後の八月の司召にて昇進する人物を示す。隆家は正四位下・左中将でまだ三位中将ではない。八月三十日に非参議・従三位左中将として『公卿補任』に掲出される。

(9) 中関白家関係系図。( )内に当時の官職と年齢を示した。



- (10) 萩谷朴氏『枕草子解環五』(同朋舎 昭和五八年)の当該章段論説、及び『枕草子大事典』(勉誠出版 平成十三年)等による。
- (11) 三巻本系では章段末尾に独自本文「されど、その折めでたしと見奉りし御事どもも、今の世の御事どもに見奉り比ぶるに、すべて一つに申すべきにもあらねば、もの憂くて、多かりし事どもも皆とどめつ」という清少納言の後日の評言で章段を締めくくる。
- (12) 「小右記」正暦三年十一月二十七日条に「新宮二条宮」とある。別称「二条北宮」として長徳二年三月四日条、同年四月二十四日条に見える。
- (13) 平岡武夫氏・今井清氏編『白氏文集歌詩索引』下冊(同朋舎平成元年)の「白氏文集歌詩編」(陽明文庫蔵 那波本)本文による。
- (14) 「清少納言枕双紙抄」の本文は加藤磐斎古注釈集成二の複製本(新典社 昭和六〇年)による。
- (15) 「枕草子春曙抄」の本文は「延寶二年甲寅七月十七日北村季吟書」の刊本奥書を有する青森県立図書館蔵工藤文庫本(国文学研究資料館マイクログラフ資料/請求番号二〇八一—五八三)による。
- (16) 松尾聰氏、永井和子氏校注・訳の新編日本古典文学全集『枕草子』(小学館 平成九年)頭注に「内裏から二条の新邸にお出になった夜」とあり、『枕草子大事典』もその様に解釈する。
- (17) 武藤元信氏著『枕草紙通釋』(有朋堂 明治四四年)による。
- (18) 金子元臣氏著『枕草子評釈』(明治書院 大正十三年初版・昭和十七年増訂 二八版)による。
- (19) 関根正直氏著『補訂 枕草子集註』(思文閣出版 昭和五二年復刻もとは昭和六年刊)による。
- (20) 「申しなほす」が、車争いをした先着女房たちの所作をとりなすことになる論理については、紙幅の関係上、別稿で論証する。
- (21) 稻賀敏二先生・上野理氏・杉谷寿郎氏著『枕草子入門』(有斐閣 昭和五五年)による。当該章段の解説は稲賀先生が担当された。なお①⑤⑦は、場面①・⑤・⑦と同部分を指す。
- (22) 稲賀敏二先生『枕草子実録的章段の虚構性へ枕草子研究の指針』(国文学 解釈と鑑賞—至文堂 昭和五二年十一月特集号)所収。後に『枕草子実録的章段の虚構性』として『源氏物語の研究—物語流通機構論—』(笠間書院 平成五年)に所収。
- (23) 萩谷朴氏著『枕草子解環五』(同朋舎 昭和五八年)の当該章段論説において「積善寺供養の段における繰り返し叙法——『枕草子』に稀有なその日記性——」と題し、述べられている。
- (24) 第一七九段「宮にはじめてまゐりたるころ」における新参女房としての清少納言は、不慣れからくる自信のなさが目立つ。定子の問いに対してもまともな対応ができなかったと描かれている。

【付記】

本稿は、平成十六年度広島大学国語国文学会秋季研究集会(平成十六年十一月二十七日・広島大学学士会館二階レブションホール)において口頭発表した内容に加筆し、論文にまとめたものである。席上貴重なご意見とご教示を賜った位藤邦生先生をはじめ、竹村信治先生、黒木香氏、そして西本寮子氏に、謹んで御礼申し上げます。

— ふるせ・まさよし、安田女子大学助教 —